

意味ある子ども参加を生み出すエンパワメントの力 —高校生の私が子どもアクティビストを名乗るまで—

郁文館夢学園 ID 学園高等学校 高木 萌伽

1 研究動機～世間から疎まれがちな子ども参画～

「子ども参加」という言葉に、世間はどのような印象を抱くだろうか。以下は私も参加する川崎市子ども会議の定例会に、加藤鮎子元子ども担当相が訪問したことを報じるニュースチャンネルの Youtube コメント欄から抜粋したものである。

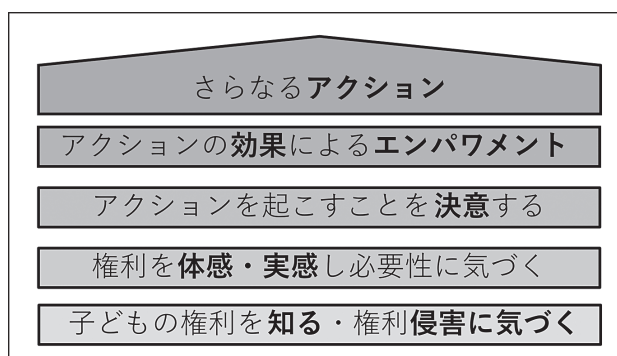
a: 子供なんて何も知らないんだから、本当に子供や子育てのことを考えるなら親世代に話を聞けよ。まあ、所詮はポーズってことやね。⁽¹⁾ コメントからは子どもを蔑視する価値観や成熟したおとなの考えが正しいと考えていることが分かる。また、子どもの声とは論理的にまとめた「意見」のみであり、Views は「Rights to be heard (意見表明権)」で保障されていないと考えている前提があると予想できる。一方で実際に子ども委員を務めて6年になる私は、aにある「所詮はポーズ」という言葉に反論しきれないことも事実である。

しかし子どもを取り巻く問題も深刻化する今日こそ、子ども参加は大きな可能性を秘めていると私は考える。そこで本研究では子ども参加の過程において、実体験をもとに子どもの権利を知ることとエンパワメントの関連性を探究した。

2 仮説と検証「エンパワメントのサイクル」～自身の経験から～

私は中学校1年の冬から子どもの権利や子ども参画にかかわる活動を始めた。中学高校での活動をもとに子どもの権利を知ることによって子ども自身がエンパワメントされ社会に対して自ら働きかけを行うソーシャルアクションが循環するサイクルがあるのではないかと考えた。【図1】

【図1】



私が初めて子どもの権利を自分事として考えたのは、地元で開催された子どもの権利条約フォーラム 2021inかわさき実行委員会に中学2年で参加した時だった。子どもの権利のまなざしで自身の身近な様子を振り返って、学校や家庭、地域で子どもの権利が守られていない事例に気づき、私に何ができるかを考えるようになった。しかし、おとながアクションを起こすときと同様に、仲間集めや何から始めるかに悩み、行動できずにいた。中学3年で地元の仲間と参加した子どもの権利条約フォーラム 2022in那覇/沖縄で、同世代の子ども若者がそれぞれ社会に問題意識を持ち、具体的に活動している姿に勇気もらった。これにより、とくに学校生活のなかで私が悩んでいた発達特性と周囲の理解について問題意識を感じ、仲間を集めてオンラインイベントの実施に至った。

この経験を通して、上記のようなエンパワメントの機会を子どもが繰り返し体験し、子どもが子どもをエンパワメントすることが、社会に対して子ども自らが働きかけをするための大きな原動力になると考えた。

3 子どもの権利を知ること ～子ども世代へのインタビューから～

さらに、子どもの権利を知ることによる子ど

も自身の変化を調べるため、私は子ども参画について活動している3人の子ども世代の方にインタビューを行った。子どもの権利を知って自身が変わったことについて質問すると、以下のような回答を得ることができた。

b: 「意見を言う権利がある」と信じられるようになった。権利は生きる力である。

c: 声を上げやすくなった。多くの人に子どもの権利を知って使ってほしいと思うようになった。

d: 解決が見えないと声をあげてを継続できない。

bとcからは子どもの権利を知ることで自身の考えを表現することへのハードルが下がったことがわかる。一方で、dの意見にもある通り、声をあげても応答責任が果たされないのであれば、声をあげる気力も無くなってしまうこともわかった。子どもにとって権利を知ることだけでなく、自身が権利を行使し声をあげた際の、おとなや社会からの納得できる応答も重要なのである。

4 おわりに ～子どもとおとなの違いとは～

この研究を通して、さらに子どもの権利を深

く理解することができた。同時に、子どもの権利を知ることが子どもにとって勇気づけられる機会になることを再認識できた。

私は活動の中で小学生世代とかかわる機会が多い。しかしながら、もうすぐ成人を迎える私と彼らの間にある違いは、それぞれの個性であり、価値観であり、素敵なところや得意なところ、苦手なことである。子どもが劣っているわけでもなく、おとなが優れているわけでもなく結局は一人ひとりが同じ人間なのだ。私は、人権とは人が人間らしく、またその人らしさを大切にしながら生きていくためのお守りだと思う。

研究を通して権利を知るとは、自分に自信を持って自分を表現することにつながると実感してきた。その声が豊かな子ども主体、意味ある子ども参加につながることを信じ、これからも一人でも多くの子どもの権利というお守りが大切にされる社会の実現を目指して、私はエンパワメントのサイクルをまわし続けたい。

注

- (1) [ANNnewsCH](#) 加藤大臣、現場視察で子どもと“本音”の語り合い「ヒントいっぱい」(2023年10月15日) コメント欄より抜粋